潜伏感嘆文の意味特性について*

熊本　千明

On Semantic properties of Concealed Exclamations

Chiaki KUMAMOTO

要　旨

定名詞句が wh 節に相当する意味機能を果たす構文としては、「潜伏疑問文」[1] (concealed question)(Baker 1968)がよく知られている。同様に wh 節に対応する意味をもつ定名詞句が現れるものに、「潜伏感嘆文」(concealed exclamation)(Elliott 1971、Grimshaw 1979)と呼ばれる一連の構文があるが、この構文に現れる定名詞句は一様ではなく、その意味的特徴はまだ十分に解明されていない。本稿は、英語の潜伏疑問文に現れる定名詞句「潜伏感嘆名詞句」の指示性の観点から、その意味機能を考察し、潜伏感嘆文の意味構造を明らかにする試みである。特に *It's amazing the height of that building.*／*It's amazing the big car he bought.* の形式をもつ名詞句外置(nominal extraposition)(以後 NE) (Michaelis and Lambrecht(以後、L & M)1994)に注目して、外置された名詞句の意味特性を考察する。

まず、日本語の潜伏感嘆文を広く「潜伏命題文」の一種ととらえ、定名詞句の背後に指定疑問文(西山 2003)、あるいは、措定疑問文(峯島 2007、西山 2013)の意味構造を想定して、変項名詞句(西山 2003)の関与の有無という観点から分析する西山(2013)、峯島(2007)の議論を追い、その分析が英語の潜伏感嘆文に適用可能であるかどうかを探る。また、NE の統語的、意味的、語用論的特徴を論じた L & M(1994)の議論を概観し、そこで提案された、NE の外置された定名詞句の諸特徴に関する説明が妥当なものであるのかどうか、検討する。その上で、実例をもとに、英語の潜伏感嘆文、特に NE における当該の定名詞句の意味特徴を考察し、NE には、日本語の潜伏命題文においては許容されないタイプの名詞句が現れることを示す。それ自体が数量の尺度や、種類・様態を表す名詞句、あるいは、数量や、種類・様態と関連する名詞句、または、属性が帰される範囲を限定する名詞句の、いずれでもない定名詞句が外置されている場合には、コンテクストから問題とされる側面が推測され、変項の値、あるいは個体の属性が、実際にそのようなものであることが、感嘆の対象になっていると考えることができる。

【キーワード】潜伏感嘆文、潜伏疑問文、潜伏命題文、名詞句外置、指定文、措定文、指示的名詞句、変項名詞句

佐賀大学　全学教育機構

Ⅰ．序

ここでは、潜伏感嘆文の解釈に関して問題とされてきたいくつかの点に、簡単に触れておくことにしたい。まず、英語の潜伏疑問文と潜伏感嘆文の典型的な例を見てみよう。（1 a）、（2 a）、（3 a）は、潜伏疑問文であり、斜体部分の定名詞句は、wh 節の表す命題と同じ意味内容を表す。

（1） a. James figured out *the plane's arrival time*.
b. James figured out what the plane's arrival time would be.

（2） a. Fred tried to guess *the amount of the stolen money*.
b. Fred tried to guess how much money had been stolen. （Baker 1968：81-82）

（3） a. *The height of the building* wasn't clear.
b. What the height of the building was wasn't clear. （Grimshaw 1979：300）

（4 a）、（5 a）、（6 a）は、潜伏感嘆文の例である。この場合も、斜体部分の定名詞句は、wh 節に対応する意味をもつ。

（4） a. It's amazing *the things children say*.
b. It's amazing what things children say. （M & L 1994：364）

（5） a. John couldn't believe *the height of the building*.
b. John couldn't believe what a height the building was. （Grimshaw 1979：299）

（6） a. It's amazing *the big car he bought*.
b. It's amazing what a big car he bought. （Grimshaw 1979：298）

（7）は、潜伏疑問文と潜伏感嘆文のどちらの解釈も許し、曖昧であるとされる（Grimshaw 1979、Castroviejo & Schwager（以後 C & S）2008）。

（7） a. John found out *the height of the building*.
b. John found out what height the building was.（疑問）
c. John found out what a height the building was.（感嘆） （C & S 2008：177）

しかし、強意を表す形容詞が現れた（8）の定名詞句は、潜伏感嘆名詞句の解釈しかもたないという。（9）、(10)が示すように、*incredible* は、疑問としての読みとは相容れないものである。

（8） John found out *the incredible height of the building*.

（9） John couldn't believe *the incredible height of the building*.

(10) *John asked *the incredible height of the building*. （Grimshaw 1979：299）

潜伏疑問名詞句と潜伏感嘆名詞句は統語的には類似点をもつが、意味的には異なるタイプに属するものであると、Grimshaw（1979）は、指摘する。潜伏疑問名詞句においては、wh 語が表す変項の値は不確定であるが、潜伏感嘆名詞句においては、変項の値は確定的である。加えて、変項の値は平均的なものではなく、極端なものであることが示されるという。(11)

は疑問の解釈がなされ、実際の建物の高さに関して中立的であるが、(12)は感嘆の解釈がなされ、その建物は非常に高くなければならない。

(11)　John asked *the height of the building.*

(12＝(5a))　John couldn't believe *the height of the building*.　(Grimshaw 1979:299)

また、感嘆文は本質的に factive であり、感嘆の対象となる命題内容は前提となっている。したがって、話し手がその高さを知らない状況においては、潜伏感嘆文を用いることはできないという。

(13)　I don't know the (*incredible) height of the building.　(Grimshaw 1979:299)

このような潜伏感嘆文の特徴を、C & S(2008)は、目的語に wh 節を取る *couldn't believe* のような感情を表す述語は、wh の変項の値が主語の予想を超えていることを示し(express)、主語が感情的であることを含意(implicate)する、という観点から述べている。

さて、潜伏感嘆名詞句は wh 節に対応する意味をもつというが、それは疑問としての解釈ではないとすると、具体的にはどのような解釈であろうか。Kay(2018)は、(14)に(15)を対応させ、(16)のようにパラフレーズする。

(14)　It's amazing *the people he knows.*

(15)　It's amazing who he knows.

(16)　The fact that he knows the people he knows is amazing.　(Kay 2018)

さらに、(14)の意味は(17)とは異なるという点にも言及している(cf. M & L 1994, Portner & Zanuttini(以後 P & Z)2005)。

(17)　The people he knows are amazing.

他方、Schwager(2009)は、潜伏感嘆文をパラフレーズする際に、驚きが数量に対するものである場合と、種類に対するものである場合とを分けて示している。(18)の文は、(18a)と(18b)の解釈をもつという。

(18)　It's amazing the people you meet at these conferences.

a. It's amazing *the number of people you meet at these conferences.*

b. It's amazing *the kind of people you meet at these conferences.*

(Schwager 2009:502)

Schwager(2009)によれば、(18)のように外置を伴う潜伏疑問文に現れる DP は、(i)関係節に修飾された任意の主要部名詞、(ii)*height*、*amount* などの段階的な性質を表す主要部名詞、(iii)*kind*、*way* のような、明示的に種類や様態を表す修飾語、を含むもの、と分類できるという。非明示的に数量あるいは種類に対する驚きを表すのは、(i)のタイプであることに注意しよう。

主要部名詞が程度や尺度を表す場合には、外置が行われた構文も、外置が行われていない構文も、ほとんど同じ意味を表すとする考え方は、広く見られるものである。[2] 例えば、M & L(1994)は、'amazing'という性質が帰されるのは、姉の知っている人々の集合であるのか、

そのような人々の多様性や数についてであるのか、という点で、(19a)と(19b)は異なるのに対し、

(19) a. *The odd people my sister knows* are amazing.

b. It's amazing *the odd people my sister knows*！ (M & L 1994:367 - 368)

(20)は、(21)と同様、尺度の解釈(scalar interpretation)をもち、その出来事が起こる特定の年齢自体ではなく、それが早い時期に起こるという事実が驚きの対象になっているという。

(20) *The age at which they become skilled liars* is amazing.

(21) It's astonishing *the age at which they become skilled liars.* (M & L 1994:368)

また、C & S(2008)は、(22a)と(22b)は真理条件が異なるが、程度表現の名詞(degree noun)が現れた(23a)と(23b)は、ほぼ同義であると述べている。

(22) a. The people that work there are amazing. *particular group of people (e.g., my co - workers)*

b. *It's amazing the people that work there.* *what people that company employs in general*

(23) a. The height of that building is amazing.

b. It's amazing the height of that building. (C & S 2008:190)

以上、潜伏感嘆名詞句は、潜伏疑問名詞句と同様、wh 節の意味をもつこと、潜伏感嘆名詞句においては、潜伏疑問名詞句と異なり、wh 語の変項を埋める値が定まっていること、NE においては、数、量、種類、様態など、感嘆の対象となる側面を明示した定名詞句が現れる場合と、どの側面が問題となるのか明示せず、そうした側面が関連づけられる対象を表す定名詞句が現れる場合とがあること、そして、尺度が関わる定名詞句が現れた NE は、対応する、外置が行われていない叙述文とほぼ同義であるとみなされること、などを見てきた。これらの観察は、潜伏感嘆名詞句の意味特性を探る上で重要な手掛りを与えてくれるが、さらに、指示性・非指示性という観点から、名詞句の意味機能について考察を加える必要がある。NE における潜伏感嘆名詞句の特徴を探るために、日本語の潜伏疑問名詞句、潜伏命題名詞句がどのように分析されてきたか、見ておくことにしよう。

Ⅱ. 西山(2003、2013)、峯島(2007)

日本語の潜伏疑問文、潜伏命題文の意味構造、文中に現れる名詞句の指示性に関しては、西山(2003、2013)、峯島(2007)が詳細な検討を行っている。潜伏疑問文、潜伏命題文においては、潜伏疑問名詞句と潜伏命題名詞句はともに変項名詞句の特徴をもち、そこには指定文の意味構造が内蔵されているという。このような「標準的」な潜伏疑問文、潜伏命題文に対し、措定文の意味構造が隠された、「非標準的」な潜伏疑問文、潜伏命題文も存在するという、興味深い指摘がなされている。

指定文は措定文とは大きく異なる意味構造をもつ(cf. Higgins 1979)。まず、措定文の意

味構造は、次のようなものであると考えられる。

(24)　措定文「A はＢだ」

A は指示的名詞句、B は叙述名詞句

A で指示される対象について、B で表示される属性を帰す。

例)あの人は学長だ。　(西山 2003、2013)

措定文「あの人は学長だ」は、「あの人」によって特定の個体を指し、その人について、「学長」という性質をもつと叙述する文である。これに対し、指定文の意味構造は、以下のように示される。

(25)　倒置指定文「A はＢだ」/指定文「A がＢだ」

A は変項名詞句［...x...］、B は変項 x を満たす値名詞句[3]

B の表わす値によって、A の表す命題関数における変項 x の値を指定する。

例)学長はあの人だ。/あの人が学長だ。　(西山 2003、2013)

倒置指定文「学長はあの人だ」/指定文「あの人が学長だ」は、「あの人」の指示対象が、命題関数［x が学長である］の変項 x を満たす、ということを述べる文である。

西山(2003、2013)は、このように規定された指定文の構造との関りにおいて、潜伏疑問文の意味構造を説明する。日本語の潜伏疑問文の例は、次のようなものである。

(26)　a. 花子は、<u>その大学の創立者</u>を尋ねた。

b. 太郎は、<u>その町のミルクの価格</u>を調べている。　(西山 2013:374 - 377)

(26)の文はいずれも、(27)の間接疑問文の形で言い換えることができる。

(27)　a. 花子は、<u>その大学の創立者が誰であるか</u>を尋ねた。

b. 太郎は、<u>その町のミルクの価格がいくらであるか</u>を調べている。

(西山 2013:374 - 377)

(26)の下線部の潜伏疑問名詞句が、疑問文と同じ意味を表すのは、意味のあるレベルにおいて、それが変項名詞句として解釈されるからであると、西山(2013)は言う。(26a)の下線部は、(28)のような命題関数を表す変項名詞句の特徴をもつと考えられる。

(28)　［その大学の創立者は x である］

倒置指定文(29)においては、(28)の変項を満たす値は「あの男」であると示され、文中で充足されているが、

(29)　その大学の創立者は、あの男である。　(西山 2013:374)

(26a)の潜伏疑問文においては、変項を満たす値が文中で充足されていない。そこで、後者の場合には、変項の位置に疑問詞語(wh 句)を補って、(30)のような「指定疑問文の意味構造」を形成しておく必要があることになる。

(30)　［その大学の創立者は誰であるか］　(西山 2013:375)

(26)では、変項名詞句は目的語の位置に現れるが、主語の位置に現れることもある。

(31)　a. <u>このクラスで一番良くできる奴</u>は明らかだ。

b. この実験では、実験室の温度が一番重要だ。　（西山 2013:378）

(31a, b)も、同様に、間接疑問文の形で言い換えることができる。

(32) a. このクラスで一番よくできる奴が誰であるかは明らかだ。

b. この実験では、実験室の温度が何度であるかが一番重要だ。（西山 2013:378）

これらは、特に、「潜伏疑問叙述文」（西山 2013）と呼ばれる。(31)の主語名詞句は指示的名詞句ではなく、変項名詞句の特徴をもつ潜伏疑問名詞句であるという点に注意しなければならない。(31a)の「このクラスで一番よくできる奴」は世界の中の個体を指すのではなく、「このクラスで一番よくできる奴は誰であるか」という疑問を表す。(31a)は、その疑問について、その答えは明らかだと述べる文であると解釈される。

同様の説明が英語の潜伏疑問文にも適用できる（西山 2003、2013）。(33)の斜体部は、意味のあるレベルにおいて(34)のような命題関数を表す変項名詞句として機能していると考えられる。

(33) John announced *the winner of the contest.*　（Baker 1968）

(34) ［x is the winner of the contest］　（西山 2013:379）

この変項名詞句における x は、wh 化され、(35)のような指定疑問文の意味構造をもつ潜伏疑問名詞句と解釈される。

(35) Who is the winner of the contest?

そこで、(36)のような意味表示が得られ、これが(33)の表す意味ということになる。

(36) JOHN ANNOUNCED WHO WAS THE WINNER OF THE CONTEST.

（西山 2013:380）

同様に変項名詞句が関わる構文として、次に、西山(2013)が取り上げるのは、「潜伏命題文」[4] である。(37)を見よう。

(37) そのドアの幅が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた。

(37)は、そのドアの幅、例えば、85cm 自体が、子供たちの脱出を妨げたと言っているのではない。そうではなくて、「そのドアの幅が85cm であるということ」が、子供たちの脱出を妨げたという表意を表す。(37)の「そのドアの幅」は、指示的名詞句ではなく、(38)のような命題関数を表す名詞句であり、

(38) ［そのドアの幅は x である］　（西山 2013:388）

その変項の値が、実際のドアの幅によって充足される。そこで、西山(2013)は、(37)の言語的意味を次のようなものとみなす。

(39) 《[そのドアの幅は、現にそうであるしかじかの幅である]という事実が、子供たちの部屋からの脱出を妨げた》　（西山 2013:388）

(38)、(39)の［　］の部分は、倒置指定文の構造を示しており、(37)の下線部の潜伏命題名詞句が、指定文の意味構造を有するものであることが分かる。以下の文も潜伏命題文であり、下線部は変項名詞句の特徴をもつと考えられる。

(40)　太郎はその天井の高さに驚いた。　(西山 2013:389)

(40)の意味は、次のように示される。

(41)　《太郎は[その部屋の天井の高さはしかじかである]ということに驚いた》

(西山 2013:389)

西山(2013)は、英語の潜伏命題文も同様に説明できるとし、次の例を挙げる。

(42)　*John's age* counts against him.

(43)　*The height of the tower* makes it dangerous.　(Rundle 1979:241 - 244)

(42)の *John's age* は、意味の深いレベルにおいて(44)のような命題関数を表す変項名詞句であり、その変項の値が[what it is]によって充足されて、(45)が得られる。

(44)　[John's age is x]

(45)　[John's age is what it is]　(西山 2013:390)

そこで、(42)の意味は、(46)のようなものとなる。

(46)　The fact that John's age is what it is counts against him.　(西山 2013:390)

このように、西山(2003、2013)は、指定文の意味構造を有するという観点から、潜伏疑問文、潜伏命題文を論じたが、峯島(2007)は、指定文ではなく、措定文の意味構造を有する名詞句が現れる潜伏疑問文、潜伏命題文があることを指摘する。例えば、(47)の潜伏疑問文は、

(47)　花子は太郎の性格を尋ねた。

(48)が示すように、指定疑問文によるパラフレーズを行うことができない。

(48)　??花子は、太郎の性格が何であるか(＝何が太郎の性格であるか)を尋ねた。

(峯島 2007: 1)

(47)の潜伏疑問名詞句が答えとして要求するのは、むしろ、次のようなものであり、

(49)　a. 太郎は、気難しい。

b. 太郎は気難しい性格(の持ち主)だ。　(峯島 2007: 1)

(47)は、次のように言い換えることができる。

(50)　a. 花子は、太郎がどのような性格(の持ち主)であるかを尋ねた。

b. 花子は、太郎が、性格という点に関して、どのような属性を有しているのかを尋ねた。[5]　(峯島 2007: 1)

峯島によれば、(47)の下線部は措定疑問文に還元される名詞句であり、以下に示す特徴をもつという。

(51)　a. 花子は、太郎の性格を尋ねた。

b. 下線部＝措定疑問文［太郎は x だ］

ただし、x には、何らかの性格を現す属性表現が入る。

c. このタイプの名詞句「NP 1 の NP 2」において、NP 2 は、NP 1 の指示対象に帰される属性の範囲を限定するという役割を担う。[6]　(峯島 2007: 2)

西山(2013)は、こうした措定疑問文と関係づけられるタイプの潜伏疑問文を、「非標準的潜

伏疑問文」と呼ぶ。

さらに、以下に示すような、措定文の意味構造を有する名詞句が現れる潜伏命題文もある。

(52)　この町の雰囲気が気に入った。　(峯島 2007: 3)

このように措定文命題を内蔵する潜伏命題文を、西山(2013)は、「非標準的潜伏命題文」と名付ける。(53)を例にとると、下線部は、(54)のような措定文の構造を有しており、

(53)　ぼくは、太郎の性格が気に入った。

(54)　太郎は、性格という点に関して、現にあるしかじかの属性を有している。

(西山 2013:402)

(53)の文全体の意味は次のように示される。

(55)　《ぼくは、[太郎は性格という点に関して、現にあるしかじかの属性を有している]ことが気に入った》　(西山 2013:402)

非標準的潜伏命題文の例としては、さらに次のようなものが挙げられる。

(56)　a. 太郎は、花子が買った車の色に驚いた。

b. この料理の味に感動した。　(西山 2013:403)

以上、少し詳しく西山(2003、2013)、峯島(2007)の議論を見てきたのは、そこで示された標準的、非標準的潜伏命題文の意味構造を理解することによって、英語の潜伏感嘆文の意味特性を探る手がかりが得られると考えたからである。例えば、(57)は、下線部が指定文構造を有する標準的潜伏命題文であると考えることができるであろう。

(57 = (5 a))　John couldn't believe *the height of the building.*　(Grimshaw 1979:299)

また、もし、潜伏疑問叙述文に並行するものとして、潜伏命題叙述文のようなものを想定することができるならば、(58a)は、その一例であると言えるであろう。そして、外置の行われた(58b)は、元の形の(58a)との関わりにおいて、意味構造が説明できるかもしれない。

(58 = (23))　a. *The height of that building* is amazing.

b. It's amazing *the height of that building.*　(C & S 2008:190)

加えて、日本語の非標準的潜伏命題文の分析を元に、対応する英語の構文を理解することができるかもしれない。こうした点については、後で検討することとし、次節では、英語の名詞句外置、NE を詳細に論じた M & L(1994)の議論を見てゆくことにしよう。

Ⅲ. Michaelis and Lambrecht(1994)

M & L(1994)は、(59a - c)のような構文を名詞句外置(nominal extraposition(NE))と呼び、構文文法の立場から考察する。これらの構文は、代名詞主語、焦点アクセントがある動詞句、一見、代名詞主語と同一指示であると思われるような文末の定名詞句、を含むという点で、右方転移(right dislocation(RD))と共通点があるが、RD とは統語的、意味的、語用論的に区別されるべきであるという。また、通常の外置構文とも異なる独自の特徴を示すため、別

個の構文として扱う必要があると考える。

(59) a. God, isn't it AMAZING the things MARRIAGES break UP over?

b. It's just AMAZING his lack of willingness to do ANYTHING for me.

c. It's STAGGERING the number of BOOKS that can pile up. (M & L 1994:362)

NE と RD の統語的な違いとして M & L(1994)が先ず挙げるのは、RD においては、代名詞主語と転位された名詞句とが同一指示的であるのに対し、NE においては、代名詞主語と外置された名詞句との間に同一指示の関係がないという点である。このことは、両者の間に数の一致があるかどうかによって明らかとなる。主語名詞句が単数の *it* であり、外置された名詞句が複数である NE の例は、(59a)に見られる。他方、RD においては、二つの名詞句の数は一致しなければならない。

(60) a. They're red LEATHER, the shoes she's wearing.

b. *It's red LEATHER, the shoes she's wearing. (M & L 1994:363)

次に、RD の場合、転位された名詞句を取り去っても、意味的にも統語的にも問題のない完全な文であるが、NE の場合は、外置された名詞句を除いた *It's amazing* のような形は、*it* が非指示的であるために θ 役割をもつ主語を欠くことになって、不適格である。NE では、外置された名詞句は焦点であり、必ずアクセントが置かれなければならないという。

さらに、限定詞 *what* は、NE には現れるが、RD には現れないという相違もある。

(61) a. It's amazing the things children say. (NE)

b. It's amazing what things children say. (NE)

c. They're amazing, the things children say. (RD)

d. *They're amazing, what things children say. (RD)

e. *It's amazing, what things children say. (RD) (M & L 1994:364)

(61b)が(61a)の文法的なパラフレーズであるのに対し、(61d)は、(61c)の文法的なパラフレーズとならない。このことは、(61c)における *the things* と(61a)における *the things* の解釈が異なることを示す。そして、NE において *what* が認可されるのは、NE 特有の発話行為のためであると、M & L(1994)は考える。

他にもいくつか統語的な違いが挙げられているが、もう一つ、興味深いのは、埋め込みの可能性に関する相違である。RD と異なり、NE は主節現象であるとされる。

(62) a. Since it was so AMAZING, the difference, he changed his mind. (RD)

b. *Since it was so AMAZING the DIFFERENCE, he changed his mind. (NE)

c. Since it was so OBVIOUS that there was a DIFFERENCE, he changed his mind. (EXTRAP) (M & L 1994:365)

NE が主節中に起こりやすい理由も、NE の表す発話行為の観点から説明されている。

NE の意味論的な特徴としては、感嘆を表す機能、それと結びつく尺度的な特性が挙げられる。M & L(1994)は、感嘆的発話を、「話者が、ある実体、状況を、性質の尺度(property

scale)の高い段階に置く」発話であると規定する。以下の文はいずれも、私の姉が知っている奇妙な人々の集合が、数の尺度上の、予期しなかったほど高い点に位置していることを示すという。

(63) My SISTER knows so many odd PEOPLE!

(64) It's AMAZING how many odd people my SISTER knows. (INDIRECT EXCLAMATIVE)

(65(=(19b)) It's AMAZING the odd people my SISTER knows. (NE)

NE にはこのような感嘆の機能があるため、NE 構文の述部に現れる形容詞は、期待に反することを示す尺度的な述語(*amazing*、*astonishing*、*incredible*、*unbelievable* など)であることが多いという。

(63)-(64)と、(65)には、しかしながら、重要な違いがあると、M & L(1994)は指摘する。(65)においては、どのような尺度のパラメータが問題となるのかを、推測しなければならない。実際は、奇妙な人々の数ではなく、多様性が問題となっているのかもしれず、(65)は、(66)のいずれにも、パラフレーズが可能ということになる。

(66) a. It's amazing the variety of odd people my sister knows!

b. It's amazing the number of odd people my sister knows! (M & L 1994:367)

外置された名詞句は、尺度で測れるパラメータ(scalable parameter)を表わすものである。このパラメータが直接示されない場合には、解釈する人が復元し、例えば、(67(=(21))における驚きは、特定の年齢(5歳)にではなく、そのようになる年齢が、子供の早熟さの尺度の高い点に位置していることに向けられていると解釈されるという。

(67) It's ASTONISHING the age at which they become skilled LIARS.

(M & L 1994:368)

また、(68)では、外置された名詞句は、そうした人々の多さを表して(stands for)おり、驚きの対象は、その人々自身ではなく、その人々が属する集合の cardinality であると M & L (1994)は述べている。

(68) Just walking in the street [is difficult]. I mean, it's UNBELIEVABLE the people who are verbally abusive to FAT people. (Obese interviewee, 'The Famine Within') (M & L 1994:362)

この尺度的な意味は NE にはあっても、外置のない構文には、通常見られないものであると M & L(1994)は言う。(69)、(70)においては、信じがたい、あるいは驚くべきという性質は、主語の人々自身に帰されている。

(69=(19a)) The odd people my sister knows are amazing.

(70) The people who are verbally abusive to fat people are unbelievable.

(M & L 1994:368)

ところが、(71)は、尺度的ではない解釈、すなわち、5歳という年齢が驚くべき性質をもつ、

という解釈をするのは難しい。

(71) The age at which they become skilled liars is amazing. (M & L 1994:368)

また、(72)は、尺度的な解釈と、非尺度的な解釈との間で曖昧であるとされる。*difference* という名詞は、構文に関わらず、通常、尺度的な解釈がなされるが、必ずしも、そのような解釈に限られるわけではないという。

(72) The difference is amazing. (M & L 1994:368)

M & L(1994)は、(69)-(72)がいずれも topic-comment の文であり、程度に関する感嘆文ではないということ、さらに、外置の有無によって解釈に違いがあるということから、尺度の読みを、NE の構文自体のもつ特徴であると考える。NE は、RD だけでなく、他の外置構文とも区別されるべき、独自の構文であるとみなされる。

NE の語用論的な特徴のいくつかは、RD との比較において示される。まず、NE の外置された名詞句は、新たに活性化が行われるが、語用論的に接近可能なものでなければならないと M & L(1994)は言う。同じコンテクストであるにもかかわらず、名詞句 *the difference* の活性化の度合いが(73a)と(73b)で異なるのは、一見、不可解である。

(73) Announcer: Hear what denture wearers all over America have to say about the difference Fixodent has made in their lives.
Denture wearer: a. It's AMAZING, the difference. (RD)
b. # It's AMAZING the DIFFERENCE. (NE)
(M & L 1994:369)

しかし、右端の名詞句は、RD においては、トピックである特定の指示対象('difference between two states')を指すが、NE においては、それだけでなく、その指示対象の、性質の尺度における値を示すという相違がある。このことから、NE において、当該の名詞句に活性化のアクセントが置かれることが理解できるという。

次いで、M & L(1994)は、NE の外置された名詞句の限定詞に関する制約を、談話上の地位(discourse status)の観点から説明する。

(74) a. It's AMAZING, {*a / the / that} difference. (RD)
b. It's amazing {*a / the / *that} DIFFERENCE. (NE)
c. There's {an / *the / *that} amazing DIFFERENCE. (PRESENT) (existential)
(M & L 1994:369)

(74a)と異なり、(74b)は、すぐ前に導入された談話対象に照応したり、外界の実体を直示したりすることができないため、*that* を用いることができない。また、(74b)は、(74c)と異なり、述語の後の名詞句の指示対象が同定できないことは許されないため、不定冠詞を用いることができない。NE における述語の後の名詞句の指示対象は、接近可能なものであり、目下の談話におけるトピックに関連のある側面を表すものでなければならないとし、M & L(1994)は、以下のような適切性条件を挙げる。

(75) INTERPRETIVE PRINCIPLE FOR NOMINAL EXTRAPOSITION: The postpredicate definite NP either (a) directly encodes or (b) metonymically refers to a scalable feature representing an aspect of the superordinate discourse topic.
(M & L 1994:370)

これまで見てきたように、M & L(1994)では、いくつか興味深い指摘がなされている。特に、NE の代名詞主語 *it* は指示的ではないという点、NE の外置された名詞句は、特定の個体を指示するのではないという点、NE と外置が行われていない構文との間には、解釈の違いがあるという点、そうではあるが、あるタイプの名詞句が現れる場合には、この二つの構文の間に解釈の違いが見られないという点は、注目に値する。しかしながら、M & L(1994)は、名詞句の指示性に関して、立ち入った議論を行っていない。尺度の解釈が行われた名詞句について、「メトニミー」的に、尺度で測れる特徴を指示する(metonymically refers)と述べているが、その意味するところは明らかではない。[7] M & L(1994)のいう尺度の解釈がなされた場合、その名詞句は、指示的名詞句であると考えてよいのであろうか。また、例えば、(65)の定名詞句 *the odd people my sister knows* が、(66)に見られるように、そうした人々の多様性、あるいは数の多さと解釈されるのも、(67)の定名詞句 *the age at which they become skilled liars* が、'the early eventuation of this life stage'と解釈されるのも、同様にメトニミー的解釈であるとしてよいのであろうか。(67)の場合には、第Ⅱ節で見た潜伏命題文の例のように、西山(2013)の「変項名詞句」の概念が関与していると考えることはできないであろうか。次節では、西山(2003、2013)、峯島(2007)による日本語の潜伏命題文の分析を手がかりに、実例を多く取り上げながら、NE における外置された名詞句の意味特性を考察することにしたい。

Ⅳ. NE の外置された名詞句の意味特性

L & M(1994)は、尺度的な解釈という観点から、NE の外置された名詞句の意味特性を探るが、実際には、必ずしも数量的な解釈を要求しない定名詞句も現れる。*the way* は、その一例である。

(76) It is amazing *the way heat lends fragrance to flowers.* (COCA)

(77) It is amazing *the way things have gone for this youngster.* (NOW)

先に、Schwager(2009)が、NE に現れる名詞句を、(i)関係節に修飾された任意の主要部名詞、(ii)*height*、*amount* などの段階的な性質を表す主要部名詞、(iii)*kind*、*way* のような、明示的に種類や様態を表す修飾語、を含むもの、と分類したことにふれた。(ii)、(iii)の名詞句は、指定文において、変項名詞句として機能しやすいタイプの名詞句であることがわかる。これらの名詞句は、NE においても、変項名詞句の特徴をもつことが予想される。これに対し、(i)のタイプの名詞句は多種多様であり、その特徴を一律に捉えることは、容易で

はない。Schwager(2009)は、NE における(i)のタイプの名詞句は個体指示の名詞句ではなく、(79)が示すように、同一指示の別の表現で言いかえることができないと言う。

(78) John is amazing.
<u>John is Mary's boyfriend.</u>
∴Mary's boyfriend is amazing.

(79) It's amazing the boyfriends Mary had last year.
<u>The boyfriends Mary had last year were exactly the students Peter had last year.</u>
∴It's amazing the students Peter had last year. (Schwager 2009:501)

このタイプの名詞句は個体(individual)指示の名詞句ではないとしても、また、個体概念(individual concept)を表す名詞句とも異なるとして、Schwager(2009)は、(80b)が(80a)と同様、適切ではないことを示す。

(80) a. # It's amazing Barack Obama.
b. # It's amazing the president of the US.
≠ *It's amazing who is the president of the US.* (Schwager 2009:501)

(80b)が容認できない理由として、関係節を欠くことが考えられるかもしれない。P & Z(2005)は、NE の外置された名詞句には関係節が不可欠であり、関係節があることが、感嘆文としての意味をもたらすと主張する。しかし、実際には、関係節があっても適切な NE にならないものもあり、関係節がなくても、NE として適切なものもある。

(81) #It's amazing [the man [who climbed Mount Everest]].

(82(=(23b)) It's amazing [the height of that building]. (Schwager 2009:501)

また、潜伏疑問文において変項名詞句の特徴をもつ名詞句であっても、NE では容認されないものもある。

(83) a. Bill told me *the capital of California.*
b. *It's amazing *the capital of California.* (C & S 2008:180)

このように、(i)のタイプの名詞句の特徴を捉えることはむずかしい。以下では、実際にどのような名詞句が NE に現れるのか、比較的特徴づけが容易であると思われるタイプの名詞句の例から、順に見ていくことにしよう。

まず、外置された名詞句が変項名詞句の特徴をもち、指定文の意味構造を有していると考えられる例がある。これは、第Ⅱ節で見た、標準的潜伏命題文に現れる、潜伏命題名詞句の性格を備えたものであると考えられる。

(84) It is amazing *the extent to which the beautiful effects of their deeds can endure.*

(85) But it is remarkable *the lengths to which some men will go to falsify military service records.*

(86) It is amazing *the level of ignorance I find, not only in the U.S. but all around the world.* (COCA)

これらは、数量の尺度が明示された例であり、以下のように、叙述文の形にした場合でも、意味に違いが見られない。

(84') *The extent to which the beautiful effects of their deeds can endure* is amazing.

(85') *The lengths to which some men will go to falsify military service records* is remarkable.

(86') *The level of ignorance I find, not only in the U.S. but all around the world*, is amazing.

関係節を伴わずにNEに現れるのは、このような、変項名詞句になりやすいタイプの名詞句であると思われる。

(87) It is amazing *the amount of talent out there in Torbay.* (NOW)

(88) It is amazing *the number of foot soldiers at the disposal of Boko Haram.* (NOW)

(89) It's amazing *his strength.* (C & S 2008:179)

次に、外置された名詞句自体は数量の尺度を表すものではないが、その名詞句が示すものの量や程度、あるいは種類が問題になることが明白であるような例を挙げよう。

(90) It is amazing *the impact that the UEFA Champions League has had on the game of football.*

(91) It is amazing *the influence Facebook has all over the world.*

(92) It is amazing *the effect this will have on your life.*

(93) It is amazing *the transformation from last season.* (NOW)

(90)-(93)においては、影響力、効果、変化などの大きさが驚きの対象となっている。これらの例は、次のように言いかえて、問題になっている側面を明示的に示すことが可能である。

(90') It is amazing *the amount of / the size of impact that the UEFA Champions League has had on the game of football.*

(91') It is amazing *the amount of / the strength of influence Facebook has all over the world.*

(92') It is amazing *the amount of / the strength of effect this will have on your life.*

(93') It is amazing *the extent of / the kind of transformation from last season.*

(90)-(93)も、叙述文の形にした場合に、意味の違いが分かりにくいものである。

(90") *The impact that the UEFA Champions League has had on the game of football* is amazing.

(91") *The influence Facebook has all over the world* is amazing.

(92") *The effect this will have on your life* is amazing.

(93") *The transformation from last season* is amazing.

(93)は、関係節を欠きながらも、容認可能であることに注意しよう。

峯島(2007)、西山(2013)で論じられた、非標準的潜伏命題文に現れる、属性範囲限定辞に

対応する表現も、NE に現れる。

(94) It's amazing *the shape of the hat he designed.*

(95) It's amazing *the atmosphere of the old town I visited.*

(96) It's amazing *the color of the car he bought.*

日本語と英語の構造上の相違について検討する必要はあるが、(94)-(96)の下線部は、措定文の構造を有し、それぞれ、形、雰囲気、色、という点に関して、どの様な性質を有しているか、ということを問題にしていると考えてよいと思われる。

(94') *The shape of the hat he designed* is amazing.

(95') *The atmosphere of the old town I visited* is amazing.

(96') *The color of the car he bought* is amazing.

そして、上記以外の様々な名詞句が、関係節を伴って現れる例がある。このタイプの名詞句は、日本語の潜伏命題文には、現れないものである。NE の外置された名詞句が複数形である場合、その数、種類などが問題となることを、(65)、(66)で見たが、単数形の場合、多様な側面が関与する。C & S(2008)は、潜伏感嘆文において、名詞を修飾する形容詞が随意に付加される場合、それは、話し手の主観的な評価を表すものでなければならないと言う。

(97) a. It's amazing the (big) car you bought.

b. You wouldn't believe the (beautiful) woman I met in that bar.

評価的ではない形容詞が現れた場合には、驚きの理由として、コンテクストにおいて際立つ、段階的な性質が推測されるとし、次の例を挙げる。

(98) It's amazing the red car you bought.[8]

⇒*It's amazing the beautiful /expensive/ big/ …red car you bought.*

(C & S 2008:180)

以下の例においても、数量、種類、効果、特殊性、重要性など、様々な側面が、推測されることになる。

(99) It is amazing *the response from the journalists who I have been talking to for the last two days in New York.*

(100) People ask me so many questions and it is amazing *the misinformation out there.*

(101) It is amazing *the communication one can have with a baby by picking up things the baby has.*

(102) It is amazing *the love they have for me in countries such as Uganda, Kenya, Tanzania.*

(103) It is amazing *the treasure you might find.* (NOW)

これらの例は、叙述文の形にした場合には，意味が異なるものである。C & S(2008)は、NE の外置された名詞句が節と結合できることを示す(104)の例を挙げているが、

(104) It's amazing *his progress* and how happy and healthy he is ! (C & S 2008:191)

この結合は、数量と直接関わらないタイプの名詞句でも可能であるのは、興味深い。

(105) It is amazing *the whole ceremony* and how people have respect for the lives that were lost. (NOW)

これまで見てきたNEの例は、いずれも、直接、数量の尺度や、種類・様態が問題となることを明示する名詞句が現れる場合も、そうでない場合も、また、どのような側面に関する属性が問題となるかを明示する表現が現れる場合も、そうでない場合も、しかじかの値をもつ、あるいは、しかじかの性質をもつ、ということが驚きの対象となることを述べる文であると考えられる。当該の名詞句が、指定文の意味構造、あるいは、措定文の意味構造を有するとする、日本語の標準的あるいは非標準的潜伏命題の分析を援用することによって、NEの意味特性の基本的な部分は理解できるのではないかと思われる。一つ、注意しなければならないのは、(106)のような例において、変項名詞句をどのようなものと考えるかということである。

(106(=(9)) John couldn't believe *the incredible height of the building.*

[x is the incredible height of the building]ではなく、[x is the height of the building]という変項を想定し、xの値に対して'incredible'という性質を帰すような操作が可能であるのかどうか、検討しなければならない。また、NEにおける外置された名詞句と、(5a)のタイプの潜伏感嘆文における潜伏命題名詞句が同一の意味特性をもつものであるのかどうかという点に関しても、十分な考察が必要であると思われる。

V. 結　語

本稿では、wh節に対応する意味をもつとされる定名詞句が現れる英語の潜伏感嘆文、特にNEの構文を取り上げ、その定名詞句の意味特性を探った。NEの外置された名詞句は、変項や、属性の帰される範囲が明示されている場合も、そうでない場合も、指定文の意味構造、あるいは、措定文の意味構造を有するものとして、分析できることを示した。また、定名詞句に、変項や、属性の帰される範囲が明示されている場合には、対応する叙述文の形式にも、意味上の差異がほとんど見られないことを示した。残された課題もいくつかあるが、また、稿を改めて論じることとしたい。

註

1. concealed question は、間接疑問文として解釈される名詞句であるが、そのような名詞句を含む文のことをいうこともある。混乱を避けるため、西山(2003、2013)の用語を用いて、前者を潜伏疑問名詞句、後者を潜伏疑問文と呼ぶことにする。後で見るように、潜伏感嘆文は、西山(2013)においては、潜伏命題文の一つに分類されている。この場合も、潜伏命題名詞句は、命題と解釈される名詞句、潜伏命題文は、そうした名詞句を含む文として、区別される。これに

ならって、ここでは、concealed　exclamation についても、感嘆文としての解釈をもつ名詞句を潜伏感嘆名詞句、そのような名詞句を含む文を潜伏感嘆文と呼ぶことにする。潜伏疑問名詞句、潜伏感嘆名詞句という用語を用いる場合、当該の言語学者が、その要素について、名詞的な解釈をもつと考えるか、節的な解釈をもつと考えるかという点は、考慮しない。

2．Schwager(2009)は、(ii)は(i)と異なり、この家はもっと低いと考えていたという予想が含まれないため、両者を同義であると考えるのは適当ではないと述べている。このことを Schwager は、予想の単調性(monotonicity)という観点から捉えている。

(i)　It's amazing the height of this house. (monotone)

(ii)　The height of the house is amazing. (non-monotone)　(Schwager 2009:507)

例えば、「1865年に建てられた家が、地盤がゆるくなったために少し沈んだ。測って見ると、新たな高さは、18m65cm であった。」というような状況においては、高さを表す数字と建造年を表す数字が同じであることが驚きの対象であり、この家はもっと低いと考えていた、という予想はないので、(ii)を用いることはできるが、(i)を用いることはできないと、Schwager は言う。(iii)も同様に、(i)と同義ではないとされる。

(iii) It's amazing that this house has the height it actually has. (non-monotone)

(Schwager 2009:508)

3．値名詞句は、指示的名詞句である場合が多いが、非指示的名詞句である場合もある。西山(2003)は、(i)における「その実験室の温度」は、特定の温度を表すのでなく、疑問の意味を表わしており、一種の変項名詞句であると指摘している。

(i)　この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ。　(西山 2003:139)

4．福地(1995)は、名詞句を *that* 節のように解さないと意味関係がおかしくなる(*one Marine unit* までで止めると、多国籍軍ではなくイラク側の部隊となってしまう)、次のような例を潜伏命題文と呼ぶ。

(i)　Norman Schwarzkopf, the allied commander, said resistance had been light, with the exception of <u>one Marine unit　that ran into and repulsed an Iraqi counterattack.</u>−*Time*

(福地 1995:28)

5．曖昧さを避けるため、西山(2013)にならって、峯島(2007)で用いられていた例文を変更した。西山(2013:393)の表記に従えば、《花子は[太郎は、性格という点で、どのような属性を有しているのか]を尋ねた》ということになる。

6．主語の指示対象に帰されるべき可能な属性の範囲を限定するものであり、これを西山(2013)は、「属性範囲限定辞」と名付ける。

7.　M & L(1996)は、(i)が示すように、*realize*、*know* のような叙実動詞の補語に現れる定名詞句にも尺度的解釈が生じ、(ii)のようなパラフレーズが可能であると述べる。

(i)　a. I realize the pressure you're under.

b. I realize how much pressure I'm under.　(M & L 1996:387)

しかしながら、本質的に尺度的な意味をもたない名詞句はこの位置に現れないため、叙実動詞を含む(ia)のような構文には、(iia)、(iib)の示すような、metonymic NP construction との関わりはないとしている。

(ii) a. I'm amazed at the PEOPLE you know.
b. I can't believe the NERVE of some people. (M & L 1996:386)

(iii) a. ?? I realize the people she knows.
b. ?? I now know the nerve of some people. (M & L 1996:387)

8．例えば、多くの人の車が特徴のない、ありふれた色をしているので、この車の色が際立つような場合には、赤さが驚きの対象となることは、十分、考えられる。

＊本研究は、平成29年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「コピュラ文の意味構造と名詞句の定性に関する研究」(JSPS KAKENHI Grant Number JP 17K02684)(研究代表者：熊本千明)の助成を受けたものである。例文のチェックをして下さったRichard Simpson氏に謝意を表する。

参考文献

Baker, Carl Lee (1968) *Indirect Questions in English*. Ph. D. diss., University of Illinois.

Castroviejo, Elena and Magdalena Schwager (2008) "Amazing DPs," in T. Friedman and S. Ito (eds.), *Proceedings of SALT XVIII,* 176 - 193. Ithaca: Cornell University.

Elliott, Dale (1971) *The Grammar of Emotive and Exclamatory Sentences in English*. Ph. D. diss., The Ohio State University.

Grimshaw, Jane (1979) "Complement selection and the lexicon," *Linguistic Inquiry* 10. 2, 279 - 326.

福地肇 (1995)『英語らしい表現と英文法』東京：研究社.

Higgins, Francis Roger (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York: Garland Publishing.

Kay, Paul (2018) "It - extraposition," Berkeley, Ling 22 Construction Grammar. http://www1.icsi.berkeley.edu/~kay/bcg/extrap.html.

Michaelis, Laura Adrienne and Knud Lambrecht (1994) "On nominal extraposition: a constructional analysis," in *Berkely Linguistics Society* 20, 362 - 367.

Michaelis, Laura Adrienne and Knud Lambrecht (1996) "The exclamative sentence type in English," in Adele E. Goldberg (ed.) *Conceptual Structure, Discourse and Language*. Stanford: CSLI Publications.

峯島宏次 (2007)「指定疑問文に還元することができないタイプの潜伏疑問文について」(2007年6月25日、慶應義塾大学大学院における西山ゼミ発表原稿)

村田勇三郎 (2007)「現代英語の語彙的・構文的事象」『立命館言語文化研究18巻4号』95 - 125.

西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』東京：ひつじ書房.

西山佑司・編著 (2013)『名詞句の世界』東京：ひつじ書房.

Portner, Paul and Raffaella Zanuttini (2005) "The semantics of nominal exclamatives," in Reinaldo Elugardo and Robert. J. Stainton (eds.) *Ellipsis and Nonsentential Speech,* 57 - 67. Dordrecht: Springer.

Rundle, Bede (1979) *Grammar in Philosophy*. Oxford : Clarendon Press.

Schwager, Magdalena (2009) “What is amazement all about?” in Arndt Riester and Torgrim Solstad (eds.) *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 13, Stuttgart: University of Stuttgart.

資料

Davies, Mark (2008) The Corpus of Contemporary American English (COCA). Brigham Young University. https://corpus.byu.edu/coca/.

Davies, Mark (2013) Corpus of News on the Web (NOW). Brigham Young University. https://corpus.byu.edu/now/.